

地球電磁気・地球惑星圏学会

SOCIETY OF GEOMAGNETISM AND EARTH,
PLANETARY AND SPACE SCIENCES (SGEPSS)

第143号 会 報 1994年7月15日

目 次

1. 1994年地球惑星科学関連学会合同大会事務局からのお知らせ	1	9. 今年度の国際交流事業について	14
2. 第95回総会ならびに講演会報告	2	10. 田中館賞推薦について	14
3. 会長挨拶	2	11. 新入会員紹介	14
4. 田中館賞審査報告	4	12. 次期, 次々期学会講演会開催地	14
5. 田中館賞受賞者より	6	13. 国際交流事業補助金受領者の報告	15
6. シンポジウムのお知らせ	8	14. 人事公募	15
7. 運営委員会報告	9	15. 研究助成金案内	16
8. 平成5年度決算・6年度予算と会費値上げについて	10	16. SGEPSS Calender	17
		17. 日本学術会議だより	18
		18. 名簿改訂アンケート	20

1. 1994年地球惑星科学関連学会合同大会事務局からのお知らせ

1994年地球惑星科学関連学会合同大会は本年3月20日～23日に、仙台の東北大学川内北キャンパスにおいて、セッション参加7学会、シンポジウム共催6学会の計13学会の参加のもとで開催されました。今回の合同学会では1121件の発表が行われ、参加登録者数は1769名の盛会でした。年度末のご多忙中にもかかわらずご参加された関係各学会会員の皆様に厚く御礼申し上げます。

次回、1995年合同学会は東京日本大学文理学部におきまして、1995年3月27日(月)～30日(木)に開催が予定されております。今後とも、皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。なお、今回の合同大会予稿集(郵送料込み、5,000円)には、まだ残部がありますので今回の合同

大会での発表内容に興味のある方は下記、合同大会事務局までお申し込み下さい。

1994年合同大会委員長
青木 謙一郎

合同大会事務局：

〒980 仙台市青葉区川内 川内北キャンパス
東北大学理学部 地球物質科学科内

1994年合同大会事務局

Tel. 022-222-1800(5327) Fax. 022-263-9279

(なるべく、ファックスで送付先と部数をお知らせ下さい)

◆裏表紙に名簿改訂アンケートがあります◆

今年の秋に学会名簿の改訂版を出す予定です。現在名簿の記載事項に変更のある方はこの会報の最後のページのアンケート用紙に記入の上、締切日までに学会事務センターにお送り下さい。

2. 第95回総会ならびに講演会報告

第95地球電磁気・地球惑星圏学会講演会は本年度地球惑星科学関連学会合同大会の一部として、本年3月20日から3月23日の4日間、東北大学川内北キャンパスで行なわれた。本学会は14のセッションを主催し、その他に「マグマ」、「雲仙普賢岳噴火と長期予測」、「地殻から上部マントルにかけての不均一構造のイメージング」、「インターリッジ：中央海嶺の地球科学」、「テクトニクス」、「変動帯日本における陸上学術ボーリング」、「地球・惑星内部の物性と進化」、「月の起源と進化」の8つの共通セッションおよびおこなわれた8つのシンポジウムすべてを共催した。

大会3日目の3月22日には本学会の第95回総会が開かれた。合同学会の時間割で時間が少ない中、重要な議題が多く、左記のように盛りだくさんな内容であった。主要な内容に関しては、以下の記事に報告があります。

第95回総会式次第

1. 開会の辞 (岡野会員)
2. 総会議長指名 議長 深尾運営委員
3. 大会委員長挨拶 (大家大会委員長)
4. 田中館賞授与 (大家会長)
5. 田中館賞審査報告 (大家会長)
6. 会長挨拶 (大家会長)
7. 運営委員会報告 (森岡運営委員)
8. JGG編集委員会報告 (河野編集委員長)
9. 議事
平成4年度決算承認 (鳥居運営委員)
平成5年度予算審議 (鳥居運営委員)
次期開催地 (園分会員)
次々期開催地 (大志万運営委員)
学会賞検討の中間報告 (湯元運営委員)
10. 謝辞 (木村評議員)
11. 閉会の辞

3. 会長挨拶 (第95回総会)

会長 大家 寛

1994年(第5回)合同大会には、当学会からも多数の会員が鋭意参加され、学問推進のため非常に意義深い機会となっていることを心から喜びとすところです。ここで、この合同学会に際してもたれるこの当地球電磁気学・地球惑星圏学会の総会において、以下の4つの点を中心にお話しし、会長挨拶とさせていただきます。

科学研究費問題と学会の求心力

まず、当学会において重要となる事は、学会の求心力ということがあります。これは、とりたてて申し上げるのは一見不思議ですらありますが、私達の学会のおかれた特殊事情に、ともすると学会の持つ本来的な意義を忘れさせるものがあってはいけないと思ひ、ここに取り上げさせていただきます。当学会での求心力低下現象の表れの一つに、科学研究費補助金「超高層物理学」で生じつつある問題があります。これは、科研費申請件数の低下が当面の現象なのですが、実はこの現象は学会の基本的問題とかかわってきているように思ひます。すなわち、科学研究費取得の意欲、研究財源のあり方とともに、申請書類の評価体勢ともかかわっています。特に評価にたずさわる人々が真の学問の流れと学会のゆくべき方向とを把握し

ている必要があり、こうした事々全ては、学会活動の責任の中にある問題と思ひます。科学研究費問題解決に向かい、まず事務的には運営委員会で具体的な方策を考え、各学会員に恋ってゆく方向で鋭意着手されていますが、会員全体の理解のもとに正しく解決を求めたく思ひます。

これも超高層関係に問題がより多くみられますが通常の小規模研究組織である大学の講座と別に、地球電磁気・地球惑星圏学会にかかわる研究所、研究施設の比率が多いのもこの学会の特徴とするところです。この超高層関係の研究所及び、研究施設がその研究活動の環境をより一層有効に整えるため、永く「外圏大気研究連絡会」がもたれていましたが、この活動も学会とは離れたものというよりは学会の一般的な活動として視野を広げ、多くの関連する機関にも貢献する事ができるよう、学会における Standing Forum と位置づけることも提案されています。その方向への努力の表れとして、まず学会開催毎にこの「外圏大気研究連絡会」を開催することになり、今回、仙台の合同大会の折には、改組後の第1回「外圏大気研究連絡会」が開催されました。非常に多数の参加者があり、21世紀をめざした将来研究方向のあり方、科学研究費補助金「超高層物理学」につい

ても一層の発展方策について話し合われました。

若手を対象とする学会賞の設立について

今期学会運営の方針の一つに学会賞のより適切な設立の問題があります。前回、1993年秋の総会で「長谷川・永田賞」が改組設立され、当学会では「田中館賞」とともに二つの学会賞が存立していますが、さらに運営委員会では、新しい問題の検討に入りました。それは「田中館賞」の性格が時代とともに変遷していることにかかわっています。後に担当する委員よりも詳細に報告があることですが、田中館賞の受賞者が、学会の歴史と並行して着実に高い年齢の方々に動いています。これは学会としては極めて自然なことで、歴史を通じ学問のレベルが積み上げられてくると、一定の高さの評価をうるためには、年数を要するようになるためと考えられます。しかし、田中館賞が果していたもう一つの役割、すなわち、若き科学者に自信と励みを与えるという点においては不適当となっています。この点を改善しようと学会ではかなり努力をしてきましたが、どうしても本質的なくちがいが時代の変遷と共に生じていて、なかなか継続的な結果となりません。つまりある時期急に若い人を推薦するのですが、どうしても学会の中堅となる方々を見落すことは出来ません。それでまた、次第に推薦される会員の年齢が上ってゆきます。この難問を解決するため、今度は、田中館賞受賞者を増加することになりました。一時期、一年に6名を越す方々の受賞もありました。最近是一年4名までという申し合せが評議員会でもたれていますが、それも多数になりすぎ田中館賞の評価に疑問をなげかける材料の一つになりつつあります。そこで、田中館賞は、確立された中堅の会員に対し授与し、別に新しい賞を設立し、若手の奨励を目的とした賞にする案が生まれつつあります。後程運営委員会から提案がありますので、会員各位のご検討をお願いする次第です。

地球惑星科学関連学会合同大会にともなう懇談会について

地球惑星関連学会合同大会がもたれるようになって、5回目に入りました。合同大会のもつ意義はより広く理解され、大きな役割を果しつつあります。こうした時期、合同大会の実行委員会が世話担当となり、「地球惑星科学関連合同大会にともなう懇談会」が開催されました。ここには、

日本地震学会、日本火山学会、日本測地学会、日本地球化学会、日本惑星科学会、日本岩石鉱物鉱床学会、そして当地球電磁気・地球惑星圏学会より会長、及び合同学会連絡委員会が集り大変有意義な会となりました。特に各学会の存立を尊重しつつ、合同学会の事務局を設立する方向で検討するという点に合意が作られた事は、今後この地球惑星科学関連学会が一層の発展を見る礎となると思われまふ。

国際諸活動について

2000年が近づいてくる昨今、我国の学会の国際的な立場は一層緻密な国際対応を要求されるようになりつつあります。すでに米国のAGUとは合同の学会としてWPGMを持ちましたが、米国のAGUのある意味での攻勢は一層盛んになり、WPGMが香港で繰り返し開催される他、Chapman Conferenceの米国外での開催の頻度が上がりつつあり、さらに研究成果発表においてはJGRへの米国外の会員からの投稿率も上昇してゆく傾向にあります。しかし、こうした中において、当地球電磁気・地球惑星圏学会がその存立の根拠を明確にしているのは、我国が自らの土壌に根差した学問を育てる事で、国際学界に貢献しているという点にあり、この重要性を忘れてはならないと思います。また単にSGEPSS一学会にとどまらず「地球惑星科学関連学会の合同」が重要となっているのもここに重点があります。そうした主体性のもとに国際協力をうちたててゆく事が大切と考えられます。その方向では、1993年には水沢で当学会会員が主催する固体地球物理学関係の重要なシンポジウムが開かれた事はまだ記憶に新しいことですが、太陽地球系物理学関係でも、SCOSTEPが主催する、第8回太陽地球系物理学(STP)国際会議が仙台にて開催されます。この会議は、さらに日本学術会議STEP専門委員会及び、東北大学が主催機関として加わるほか、IAGA, IAMAS, URSI, IUPAP, IAU等の国際学協会組織に並び我がSGEPSSも共催いたします。この会議では学問研究の他21世紀における国際協同研究のあり方も協議されるワークショップが開催されます。当学会会員の努力によって稔ったものとして日本学術会議地球電磁気研究連絡委員会から発表されている「地球電磁気学の発展的将来」等もベースになって、今後の進む方向が議論されることとなります。

平成6年度、当地球電磁気・地球惑星圏学会においては、佐川永一会員、中西正男会員、森永速男会員、および山本達人会員の4氏が田中館賞を授与されることになりました。

佐川永一会員（通信総合研究所）

田中館賞 第134号

「衛星観測データによる電離圏・磁気圏の熱的プラズマの研究」

佐川永一会員の研究は電離層及び、極域における熱的プラズマを主題として二つの項目よりなっています。まず、電波研究所が宇宙開発事業団と協同で打ち上げたISS-b衛星による電離層電子温度及び、電子密度のグローバルな分布の観測についてそのデータ解析においてなされた成果です。これは、それまでAE衛星の観測からその存在は知られていたのですが、夜間の電子温度の緯度分布において問題となる磁気赤道付近で出現する低温領域に関するものです。今回佐川会員の研究によって、はじめて明かとなったのは、この電子温度の低温領域出現に特別な経度が存在すること、そしてそれが季節に依存して変ることでした。低温領域の発生が中性風によって駆動される電離層プラズマの流れに起因する断熱冷却であること、そして、それは地磁気赤道付近の地磁気偏角と中性風の風向きによって定まる特定の経度範囲に顕著に現れるという考え方を確認する重要な成果となりました。

また、第二の項目としては電離層起源のO⁺イオンの実証の問題があります。磁気嵐時の環電流の発達に同期して、O⁺イオンの増加が問題にされはじめたとき、佐川会員は、DE-1衛星による長期間のイオン組成観測データを使って磁気圏内部の低エネルギーイオン（ ≥ 1 keV）の研究を行い、そのイオンのピッチ角分布の特徴から、これらのイオンが電離圏より上昇していくことを実証しました。しかしDE-1衛星のデータの分解能は、かならずしも充分と言えない部分もあり、その後、我国が打ち上げ観測に入ったEXOS-D（あけぼの）の観測に対する同会員の研究の結果、一層明確な結論に至りました。

EXOS-D（あけぼの）衛星の観測に際しては、また同会員はカナダNRCのグループの我国での衛星搭載に関する作業の仲介役をさまざまな形で果し、SMS (Suprathermal Mass Spectrum Detector) の開発に協力して大きく貢献しています。さらにEXOS-D衛星のSMS観測においては、カナダのグループと協力し、観測を推進するとともにデータ解析を通じ新しい知見を得ております。顕著なものとしては極域電離圏でのH⁺、He⁺及びO⁺イオンの高度

分布を求め、高度2000kmから6000kmの範囲では高度とともに極風（ポーラウインド）が加速されることに対応し、イオン温度が低下してゆくこと、そして特にO⁺の速度分布が有意に非等方性を示し、電離層から磁気圏へと供給されていることも確認しました。

以上、佐川会員は磁気圏—電離圏結合を理解する上で欠く事のできない熱的イオン及びそれに近い低エネルギーイオンの研究を衛星データの解析、搭載機器の開発の両面から進めていて、イオンの運動に関する実証を行った成果は、高く評価され、ここに田中館賞が授与されました。

中西正男会員（東京大学海洋研究所）

田中館賞 第135号

「太平洋中生代の地磁気異常図の確立と海洋底拡大史の研究」

海底に分布する岩石に刻まれる地磁気異常の縞模様状の領域の観測は、プレートテクトニクス理論を確立する基礎になったものですが、同時に地球磁場の逆転の歴史をも明らかにすることを通じ、地球磁場の生成過程の研究にも重要な寄与をしています。

中西正男会員の研究は西太平洋地域の海底に対する観測船による海洋底磁場観測データの解析を行ったもので、東経140°から西経160°、南緯10°から北緯45°にわたる範囲の磁気異常図を確立しました。観測船の航路として設定される400本に至る測線に沿うデータをコンパイルし、観測値と平均磁場の差として出現する異常値を相互関連に矛盾を起こさないよう配列させつつ客観性の高い形で完成したもので、GRLの表紙にも取り上げられた画期的な内容のものです。

中生代の海底地磁気の観測値は、8000万年～1億2000万年前白亜期中頃位までは、地磁気静穏期となっていて容易にそのつながりを追うことができますが、1億2000万年以前の白亜期前半とジュラ紀に逆のぼると激しく逆転を繰り返す時期がありました。したがってプレートの移動とかかわって地磁気異常値の分布も非常に複雑な分布を示しますが、同会員の研究は相互関連を刻明に追ってこの分布を明確にしました。

この結果、ハワイ磁気異常群において海底拡大速度は一定でないことを実証することができ、白亜紀前半からジュラ紀後半に逆のぼる時期に見られるM

シリーズとよばれる中生代の地磁気逆転史を改訂する必要があることが明らかとされました。さらに、この研究は、太平洋が拡大してきた歴史の究明に対しても重要な貢献をすることになりました。すなわち、太平洋の起源が、今はほとんど消え去ったフェニクス、ファラロン、イザナギの三つのプレートに囲まれる3角形の場所、すなわち、北緯15°東経162°付近にあること、そして、求められた磁気異常図からは、海底の拡大速度の変遷や拡大方向の変化も判明してきました。

以上、中西正男会員の研究は、西太平洋中生代について困難とされていたジュラ紀から白亜紀前半にかけての時期の地磁気異常分布に対する極めてすぐれた成果と内容を持ち、今回田中館賞が授与されました。

森永速男会員（姫路工業大学理学部）

田中館賞 第136号

「鐘乳石による地球磁場永年変化と古環境の研究」

推積岩に残留する磁場や、生物活動の跡としての花粉の様相から過去の地球磁場永年変化や気候変動の解明が行われていますが、森永速男会員の研究は、鐘乳石に記録される磁場及び、酸素や炭素の同位体比から過去の地球磁場永年変化ならびに気候変動の解明を試みたものです。鐘乳石を使うことの長所は鐘乳石の成長が、極めて定常的で時間変化が正確に求められる点にあります。推積岩の場合、推積物の運搬その積み上げ速度等に多くの要因があり、あくまで推積の速度の一定性は仮定されたものに過ぎません。一方この鐘乳石による手法が困難なのは、成長速度が遅いので微小な領域の変化の中の磁場変化を安定した高い精度で計測せねばならぬ点です。同会員はこの点、微小領域の微弱磁場を雑音に妨げられず分析する独創性ある手法を開発し、その適用を慎重に進め従来不可能といわれていた微弱磁化の測定を可能にしました。その結果、過去15,000年に亘る地球磁場の永年変化の復元に成功しました。更に、この測定を、地磁気永年変化に関する研究の結果がほとんどない中国においても行い、同国における地磁気永年変化を復元する研究にも積極的に携っております。

また、同会員の研究は、鐘乳石の磁化機構に関しても模擬実験を行う等の基礎研究を行っております。この結果から、溶液から結晶が晶出成長する際、この溶液中に含まれる強磁性体が、外部磁場の方向にその磁化方向を揃えつつ結晶に内包されるといふ事実を確認しています。

以上、森永会員の研究は地磁気永年変化と対応す

る古環境変化にかかわる極めて重要で独創性の高いもので、今回田中館賞が授与されました。

山本達人会員（宇宙科学研究所）

田中館賞 第137号

「オーロラ・ダイナミックスの研究」

オーロラは、磁気圏と電離圏を結ぶエネルギーや物質の輸送にかかわっている波動粒子現象の中で、目に見えるという点で多くの人の関心と呼んでいるばかりでなく、磁気圏・電離圏結合系の研究において中心をなす重要な研究主題の一つとして知られています。

山本達人会員は、このオーロラにかかわる研究において、オーロラ画像処理に卓抜な解析手法を導入し、オーロラの形態とその時間的変動の本質的な特性について新たな知見をうることができました。この研究成果及び、研究の発展への貢献は1) 脈動型オーロラの運動と時間変化 2) カスプ領域におけるオーロラの動態と地磁気変動 3) オーロラのドリフトと磁気圏電場 4) サブストームに伴うオーロラ変動と粒子降下 5) 「あけぼの」衛星によるオーロラ観測とデータ処理の各項にわたっております。これらの中で特記されますのは、まず脈動型オーロラに対して、山本会員は、テレビ画像から空間的な構造を考慮しつつ時間変動を取り出す方法を開発し、脈動オーロラが、本質的にパルス的であることを見出しました。そしてそのパルス巾はほぼ一定で、パルスが出現する周期が種々変動するという事を明らかにしました。

さらに山本会員はEXOS-D（あけぼの）衛星観測によるUVテレビ画像処理においても大きく貢献するとともに、オーロラ画像と降下粒子との関連、磁場、電場のデータとの対比を通じ、オーロラと沿磁力線電流、さらには磁気圏プラズマ対流とオーロラとの対応について研究を進めてきました。磁気圏・電離圏結合系の研究では、磁気圏に生ずるいくつかの境界層と極域電離圏の境界との結合状態を知ることは重要な課題ですが、同会員の研究では、最も極冠域側に出現するオーロラは、従来単純に考えられてきたようにプラズマシート境界層につながるとは限らないことを示しました。

以上、このオーロラ画像の処理とオーロラダイナミックスの解明に対して独創性も高く学界に大きく貢献する研究に関し、山本会員に今回田中館賞が授与されました。

5. 田中館賞受賞者より

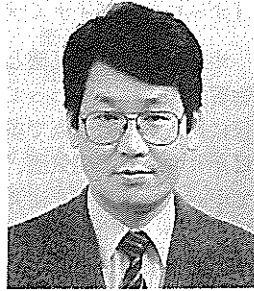
佐川永一会員（通信総合研究所）より

この度本学会でも伝統ある田中館賞を受賞できた事は私にとって望外の喜びです。この小文を始める前に改めて関係各位にお礼を申し上げたいと思います。

今回の受賞論文の題名にありますように、私はこれまで、電離圏から磁気圏に存在する最もエネルギーの低いプラズマである熱的プラズマ、そのなかでも特に熱的なイオンについての研究を主要なテーマとして来ました。研究の手法としては人工衛星やロケットによる観測で得られたデータを解析する事を主としています。しかしながら、これまでの私の研究生活の中では観測を行うためのハードウェアの開発も大きなウェイトを占めてきました。

振り返ってみると私がこの分野の研究をはじめたのは、旧電波研究所に入所したときに、所の大規模プロジェクトとして進められていた電離層観測衛星(ISS)計画に参加した時でした。その時代は国際的にはIMS計画が進められており、わが国でも宇宙科学研究所によって「極光」、「じきけん」の二つの衛星が相次いで打ち上げられた時もあり、現在の「あけぼの」、「GEOTAIL」二つの衛星が観測しているのと似た状況であったともいえますが、わが国での人工衛星を使った宇宙科学研究の分野が、蓄積色の夢をまだ持っていたころと言ってもいいかも知れません。そのあと、データ解析だけではありませんが、ISIS, DE-1衛星のグループにも参加してきました。1989年に打ち上げられた「あけぼの」衛星ではカナダNRCのグループと共同で搭載機器の開発とデータ解析を行う事ができました。その搭載機器は磁気圏での熱的なイオンのエネルギー分布とイオン質量を同時に観測するために、従来とはかなり異なった技術を用いたもので、開発を進めたカナダのDr. B.A. Whalenの研究に対する真しな姿勢とともに強い印象が残っています。この共同研究は個人的にも得るところの非常に大きなものがあり、私の主要な研究課題として引続き進めていきたいと考えています。

このように、これまでの私の研究はいわゆる



ビッグプロジェクトに関連したものが中心でしたが、最近は何年をとって気が短くなったせい、あるいは、自分の研究生活で残されている年数のためか、もっと小廻りの効く仕事をやってみたいなと感じています。これまでのハードウェア指向はなかなか変えるのは難しいとは思いますが、今後は一人のサイエンティストとしてどのような研究テーマそしてそのための研究手法として何が良いのかを考える事から、私の研究者としての生活を再構築していきたいと考えています。

中西正男会員（東京大学海洋研究所、現在カリフォルニア大学サンディエゴ校スクリップス海洋研究所）より

今回田中館賞受賞という名誉に預かり、とても光榮に感じています。昨年私の指導教官でもあった小林和男先生（元東京大学海洋研究所教授、現在科学技術庁海洋科学技術センター研究顧問）の退官にあたり、小林先生の経歴をまとめていました。その時に、小林先生が田中館賞を受賞しておられることを知り、私もいつかは田中館賞をいただけるような研究を行いたいと心に誓いました。その時には、まさか1年後に田中館賞がいただけるとは夢にも思っていませんでした。



私はこれまで世界中の研究所で取られた航海データ（373航海分、バイト数にして約250 Mバイト）を使い、北西太平洋の中生代磁気異常縞模様と同定を行いました。その結果を基に当時の太平洋プレートのテクトニクス（発達史）の研究を行ってきました。磁気異常縞模様の研究を始めたきっかけは神戸大学に在学の時に聞いた講義でした。海上で船から磁力計を曳航することによって地磁気を測定すると、地磁気とはまったく関係のないはずの海底の年代と当時のプレート境界がわかるということを知りました。そして、その時の磁気異常縞模様に興味を持ちました。神戸大学での卒業論文に始まり、東京大学での修士・博士論文まで一貫して北西太平洋における中生代磁気異常縞模様の解析を基にした研究を行ってきました。

た。その成果が今回の田中館賞の受賞につながりました。これまでの研究において私にご指導下さった小林和男、玉木賢策両先生をはじめ他の先生方に深く感謝致します。

私が研究した海域は、南緯10度から北緯45度、東経140度から西経160度です。この北西太平洋には、太平洋プレートの周りに存在した海嶺でできた5つの磁気異常縞模様群があります。それらは日本縞模様群、ハワイ縞模様群、フェニックス縞模様群、マジラン縞模様群、中部太平洋海山縞模様群です。これらの縞模様群からこの海域の年代はジュラ紀後期から白亜紀前期であることがわかります。年代にして約1億6千万年前から1億1千万年前までの間です。この時代は中生代に相当することから、これらの縞模様群は中生代の英単語にあたるMesozoicの頭文字のMを取ってM系列(M sequence)と呼ばれています。この海域の航海データを1つ1つ根気よく目で見ることにより、手作業で一本一本縞模様を同定していきました。縞模様の詳細な検討よりいくつかの新しい見解が得られました。北西太平洋に存在する海台であるシャツキーライズの成因を明らかにしたのもその一つです。私の研究の詳細については、小林和男教授退官記念号"大洋底のダイナミクス"(海洋出版号外第9号)に書かせていただいておりますので、それを参考していただけたら幸いです。

私が自ら参加した航海は僅かに7航海で、日数にして約180日ぐらいです。1960年代から現在まで約30年間にわたって、多数の研究者が行った研究航海にて得られた膨大な数のデータがなくては私の研究は成り立ちませんでした。これらのデータを取るためにご尽力された研究者の方々やそれらの研究航海で船の運行にあられた乗組員の方々に深く感謝いたします。さらに、これらの貴重なデータを日夜整理・管理し、私の研究のためにデータを提供して下さった米国NOAAのNGDC(National Geophysical and Solar-Terrestrial Data Center)と海上保安庁水路部の日本海洋データセンターの方々にもこの場を借りて改めて感謝申し上げます。今後は今回の田中館賞受賞を励みにさらに研究に専念していきたいと思っています。

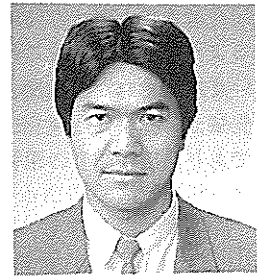
森永速男会員(姫路工業大学)より

田中館賞をいただき大変うれしく思います。有

り難うございました。受賞の対象となった、「石灰洞窟内の二次生成物(鍾乳石)を用いて地磁気永年変化を復元する」というこの研究は私の最初の研究テーマであり、私のこれまでの研究歴の中心をなすものです。鍾乳石は非常に微弱な残留磁化を持っています。これを測定し、その結果から地球磁場永年変化を復元するためには、超伝導磁力計という高感度の磁力計が必要です。私が学んだ神戸大学理学部(安川克己教授の研究室)にはその磁力計があり、入手困難な鍾乳石がちょうど学部4年生の時に研究室に持ち込まれました。卒業研究に何をしようか皆目見当のつかなかった私に、研究のアイデアとともに測定を進めてくださったのは安川先生と井口先生でした。幸運なことに、その試料が弱いながらも残留磁化を持っており、そのことが名誉ある田中館賞受賞につながったようです。受賞の時、SGEPSS会長の大家先生は「originalな研究」という大変有り難いお言葉をくださいましたが、上述の研究の始まりの頃を思い出すと大変恥ずかしいです。

修士課程学生の頃(1980年代始め)、新しく試料を入手し測定をしておりましたが、その当時はまだ同様な研究をしている研究者が他に少なく、つまり参考となる研究がなく(後でわかったことですが、論文ではカナダの研究者に一步先を越されていました)、色々な面で悩みました。磁化はどのように獲得されるのか?磁化は過去の地球磁場を反映しているのか?どんな磁性粒子が磁化を担っているのか?堆積物のように沈積(堆積)面の傾きに磁化は影響されないか?答えは薄々予想できましたが、それを確実に突き止める実験が思いつかなくてずいぶん悩みました。現在では、その時悩んでいた問題の多くは(論文にはなってないものもありますが)解決しています。また、鍾乳石中の酸素の安定同位体比から古気候復元や古地磁気から古地震の年代決定などを行い、他の分野にも貢献できるようになっています。今後は今まで手薄だった年代決定に特に力を注いでいきたいと思っています。

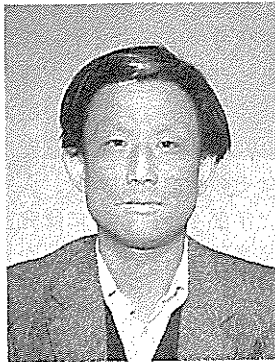
現在この研究を行っている研究者もしくはそのグループは、以前に比べると確実に増えています。最近始めた研究者から問い合わせが来る度に、同業者ができたとうれしく思います。5年、10年先に一層



研究者人口が増えた時に先駆的研究として引用されるようなよい研究をこれからも残していきたいと思えます。それがご教授、ご鞭撻をいただいた先生、先輩そして共に研究を進めてくれた後輩への恩返しであり、田中館賞の榮譽に報いることと考えています。

山本達人会員（宇宙科学研究所）より

今回田中館賞を受賞することができ、諸先生・諸先輩方の末席に加えさせて頂いて大変うれしくまた名誉に思っております。今までご指導を頂いた方々、共に研究を行ってきた方々に深く感謝を致します。



私が当初地球物理学を志したのは、上田誠也先生の「新しい地球観」を読んだの事だったと記憶しています。その私が磁気圏物理学に宗旨替えしたのは、地球物理学科に進学した後での、佐藤哲也先生の「関西弁の魅力ある講義」と、小口高先生の研究室で見せて頂いた「南極で取られたオーロラのビデオ」でした。大学院生時代を通して見続けたオーロラの不思議さは、5感で感じられる地球物理現象として地球物理学者に研究の動機づけを与える自然界の究極の1つではないでしょうか。

実際のオーロラを見る機会を得たのは、卒業後、家内製手工業による観測機材を抱えてのカナダでの現地観測に参加した時でした。氷点下40°の真冬、カナダの最果ての町、グレートホェールリバーでオーロラのブレイクアップを見た時の感激は今でも忘れられません。ちなみにA/Eインデックスでおなじみのグレートホェールリバーは英語系/仏語系カナダ人、エスキモー、インディアンの混在した町で、町の名前もグレートホェールリバー以外に、ポストデラバレイン（仏語）、クウジュウアラピク（エスキモー語）、ワップマグスティ（インディアン語）と計4つあり、4ヶ国語が飛び交う不思議な町です。現地では、エスキモーと間違えられる事もしばしばでした。極寒の大雪原で汗まみれになりながらセンサー埋設し、「This is the Geophysics!!」と叫んだ事を覚えております。

その後、宇宙科学研究所の「あけほの」計画に参

加させて頂き、宇宙から見るオーロラを解析する機会を得ました。衛星による研究は、オーロラの故郷を求めてさらに磁気圏の奥深くを探る「GEOTAIL」計画と続き現在に至っています。その間に職場も東京大学理学部から宇宙科学研究所に変わり、現在では飛翔体を用いた実験的研究に主体が移りました。その変化の中でも、自分自身の5感ではありませんが、自分達が設計し調整した計測器を用いた、いわば、第6番目の感覚で自然を探っているのだという気持ちは忘れない様に心がけています。

現在は、「あけほの」、「GEOTAIL」に併せて、1998年に火星を目指して打ち上げ予定の「PLANET-B」の中核に参加しております。我々の学会がカバーする研究領域も21世紀に向けてさらに拡大しようとしています。特に、学会名の1部でもある「惑星圏」の分野については、我国の衛星技術の進歩によって、地球からの間接的な観測・諸外国からの衛星データ解析から、自らの企画による実証的な科学への道が開かれようとしています。「PLANET-B」の先は、現在中堅どころとしての責務を負った我々の世代が、諸先生方がこれまで築かれた学会分野をさらに発展させるために努力していく領域と考えております。

最後に、数多くの観測データ、地上・衛星観測の機会に恵まれたのも諸先生・諸先輩方のおかげと深く感謝いたします。今後も「5感で感じた自然現象の感激」、そして「汗まみれで実現する観測の心」を忘れずに、微力ながら地球惑星圏物理学の発展に貢献出来る様、努力したいと考えています。

6. シンポジウムのお知らせ 第18回極域における電離圏磁気圏 総合観測シンポジウム

極地研究所では、上記シンポジウムを下記の通り開催いたします。

開催日：1994年11月1日（火）

～2日（水）

会場：国立極地研究所講堂

申込：研究発表申込書に記入し、予稿原稿を作成の上下記に提出願います。

締切日：1994年9月16日（金）必着

申込先：国立極地研究所電離圏磁気圏シンポジウム係 行松 彰

7. 第175回運営委員会報告

平成6年3月19日、第175回運営委員会が仙台国際センターにおいて開かれた。その主な内容は以下のとおりである。

1. 前回議事要録の承認の後、会務担当から前回以降の活動報告が行われた。
2. 第95回総会・講演会準備打合せ
第95回総会における式次第、審議事項の確認及び、役割分担打合せが行われた。
3. 平成5年度決算及び平成6年度予算原案
会計担当者より平成5年度の決算案の報告があり審議した。年度当初の予算に対してJGGの出版費（会誌分担金）が増大したため、前期からの繰越金を使い込む決算となることが承認された。JGG出版費に対する会の分担金は次年度以降も年間180万円（前年度比100万円増）となることから、平成6年度の予算案に関して改めて、会費値上げ問題、JGG購読料化の問題との関連で審議された。その結果学会基金から300万円をJGG発展事業費として特別支出し、学会経常費に組み込み、平成5年度からの3年間のJGG発展事業費にあてること、平成7年度以降会費値上げを再検討すること等を含めて平成6年度の予算原案が立てられた（会計担当報告の項参照）。
4. 新入会員の承認
前回の運営委員会以降入会の申し込みのあった正会員4名、正会員学生9名及び海外会員4名について審査し、入会が承認された。（新入会員紹介の項参照）
5. 国際学术交流（派遣）の審査
国際学术交流派遣の本年度前期について申請のあった件について審査し、京都大学超高層研究センターの白井英之会員の派遣を決定した。
6. JGG将来計画について
関連学会（日本地震学会、日本惑星科学会、日本火山学会及び日本測地学会）に対し、JGG誌を協同編集による合同誌とする提案を行う文書が、各学会会長宛に会長から送付されたことが紹介された。協同編集を実施するとき購読制に踏み切ることが財政問題に対処する一つの自然の解決の方向であろう。しかし購読制が成立するにはJGG誌を会員自ら購入したいと思うレベルにもってゆく必要がある。JGG誌を既存の国際誌と対等のレベルまで引き上げる決意

を会員一人ひとりがもち、後には引けない状況にあることを会員全員が自覚するよう訴えていく必要があることが確認された。

編集委員会から要望のあった旧ソ連、東欧への支援として運営委員会側のJGG誌配布検討の委員として湯元運営委員を推すこととした。

7. 科学研究費問題について
科学研究費細目「超高層」への申請件数の低下の原因について意見が交換され、建て直しの具体策を早急に検討することとした。学会会期中に開催される施設連絡会においても話題にするともに学会としての具体策を3月末にWGを開催し検討することとした。
8. 学会会期4日制について
前回の運営委員会の議論をふまえ、次回名古屋において開催される学会では講演数の多い分野については会期を一日延長したプログラム編成とする事が確認された。
9. 学会賞について
田中館賞受賞者の年齢が時代と共に上昇している現実にたいして分析が行われた。学会の歴史が進みその内容が充実してゆくとともに「田中館賞」の性格が当初にもっていた若手会員の奨励をもかねていた性格から中堅会員の評価を示す賞へと変遷してきているとの認識がされた。この認識に基づきあらためて若手会員とくに博士号取得直後の会員をencourageする賞の設定が議論された。具体的な賞の設定及び規定等の検討はさらに運営委員会で審議を続けることとするが、若手の学会賞の検討経過を中間報告として総会で報告することとした。
10. 合同大会実行委員会企画による地球惑星科学関連学会拡大連絡会の開催について
今合同大会実行委員会が企画し、地球惑星関連学会の拡大連絡会が開催される経緯と、この拡大連絡会が各方面から積極的に賛意をもって受けとめられていることが報告された。
11. その他
今年中に学会会員名簿を作成することが確認された。次期合同学会は平成7年3月27-30日にわたり日本大学理工学部において開催される計画であることが報告された。

8. 平成5年度決算・6年度予算と会費値上げについて

平成5年度決算と6年度予算

第17期の運営委員会では、学会財政についての議論を当初から続けてまいりました。端的に申し上げれば、いつまで会費を値上げせずにやっていたかという問題に解答を出すことでした。前回の会報（142号）には、当面の会費値上げを避ける方針が検討された旨報告されております。このような方針は、JGG誌の将来構想が明確になるまでの3年間は、できれば現状のまま乗り切りたいという運営委員会での議論に基づいておりました。そのために、会費納入の効率化（自動引落制度の導入）、経常経費の見直しの努力などが行われました。その一方で、合同大会の開催、国際交流事業の開始、会報の充実など学会としての事業規模はむしろ拡大してまいりました。また、郵便料金の値上げ、学会事務センターの委託経費の値上げなど、一般的な物価上昇圧力も強まりました。

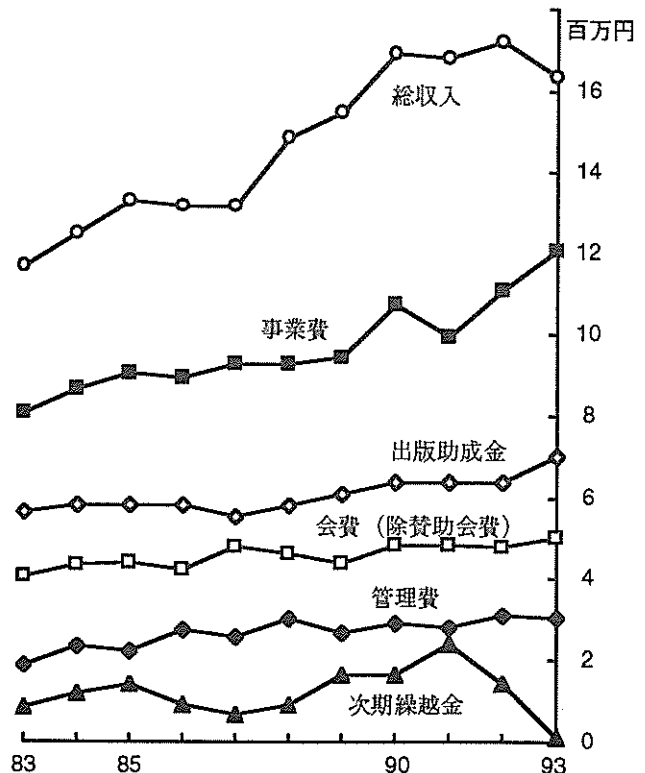
平成5年度決算案と6年度予算案は、このような状況下で第95回大会（@仙台）にお計りしご承認いただきました。それぞれは別表1と2に示されておりますが、要点を以下にご説明いたします。まず決算につきましては、収入は会費収入が前年に比べ約20万円増えたこと（滞納分の払込など）、文部省からの出版助成金が64万円増額されたことなどがある反面、合同大会での予稿集の販売方式の変更などのため大会関係の収入が約75万円減るなどしております。結局、前期繰越分の減額分にほぼ相当する83万円の減収（前年度比）となっております。

支出の方は、管理費（会員業務や経理業務の経費、通信事務経費、運営委員会旅費など学会事務センターに委託している部分）は諸経費の値上がりにもかかわらず前年に比べ約9万円減、一方事業費（JGG関係、大会関係、会報関係などの経費）は約100万円増えています。以上の結果として、平成4年度からの143万円の繰越金をほとんど使い果してしまい、9万円弱しか次年度に繰り越せませんでした。これは、単年度では134万円の赤字となっていることを意味しますの

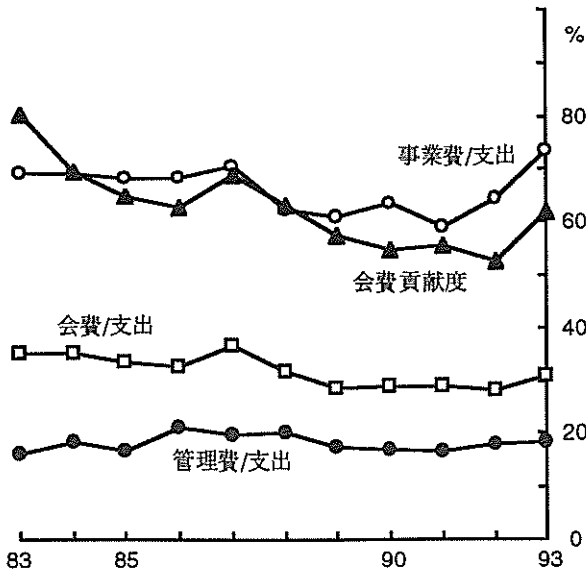
で、来年度は数字上からも赤字繰越になることが予想される事態になりました。

平成6年度予算につきましては、上述の決算に対応して、以下の3つの対策を盛り込んだ案を作りました。まず、JGG誌の学会負担増（毎年約100万円）に対応するため、「JGG発展事業費」300万円を新設し、これによって平成5から7年度の3ヶ年分をカバーします。この財源は学会基金の一部を取り崩して充当いたします。また、決算の項で述べましたように、JGG誌の問題とは関係なくすでに実質的な赤字状態となっていることを一時的に補い、さらに今年度予定通りに会員名簿の発行を可能とするため、国際交流事業への支出を除いた賛助会費収入を一般財源に流用いたします。3番目にあらゆる経費の節約に努めます。この結果、表に見られるように約90万円の次期繰越金を見込んだ平成6年度予算案を作ることができ、大会で必ずしも十分な時間ではありませんでしたが議論の後ご承認いただきました。

このような状況に立ち至った原因を分析してみます。前回の会報でも、また総会でもご説明い



第1図：収入・支出の経年変化。



第2図：支出に対する事業費、管理費、会費収入（賛助会費を除く）の百分率と、会費貢献度＝（会費）／（管理費＋事業費＋次期繰越金－出版助成金）×100の経年変化。

たしましたようにJGG誌の学会負担分の増額の問題があります。平成5年度からはJGG誌の継続的な出版のために、学会から毎年少なくとも180万円の支出が必要となりました。従来に比べると毎年約100万円の支出増となりますが、運営委員会としてはすでに出版社の努力は限界に達しており、JGG誌の継続的・発展的な出版維持のためにはこの支出増は避けられないという結論に達しました。このため、学会基金を使ってでも当面JGG誌を支える必要があると判断いたしました。ただし、これはあくまでも3年後に予定されているJGG誌の改革（会報142号の編集委員会報告参照）が軌道に乗るまでの暫定的な措置であります。JGG誌に関連した財政的な問題はこれで当面は回避できましたが、それにもかかわらず学会財政は困難な状況にあります。第1図と2図に過去10年間の学会財政に関するいくつかのパラメータの変動を示しました。第1図からは、一般会費収入の伸びが頭打ちであるにもかかわらず、事業費が増加を続けており、その結果次期繰越金が急減している事実が読み取れます。第2図には支出に対する会費、管理費、事業費の百分率の変動が示してあります。さらに、会費貢献度＝（一般会費）／（管理費＋事業費＋次期繰越金－出版助成金）×100というパラメータを示しましたが、これがこの10年間基本的に減少しつづけているこ

とが分かります。あまり詳しくは分析結果を述べませんが、事業規模が拡大（学会の活動度が増加していることを示している）しても、支出に見合う収入が最近では十分に確保されていないと思われます。

学会費値上げ問題

初めに述べましたように、運営委員会では学会費値上げをすることなく向こう3年間ぐらひは乗り切れるかと考えましたが、現在の学会の活動度を維持するためにはこの問題を再考せざるを得なくなりました。前年会費値上げをしたのは1983年でちょうど10年がすでに経過しました。1988年からは大会参加費を徴集するようになりましたので、ある意味での値上げは行われています。大会参加費の採用は学会の収入確保に効果的であったことは第1図からも読み取れます。しかし、春季大会が合同大会になったために春の大会関係の収入が個別学会に直接入らなくなったこと、その一方で

は大会経費が減ったこととの兼ねあいでやや流動的で、現状では必ずしも収入の安定化にはつながっておりません。来年度予算では急場を凌ぐために学会基金への積み立てを止めましたが、いわば日々の生活のために積み立て預金を止める類のことですから当然限度があります。物価の上昇という問題は常にバックグラウンドとして存在していますし、どうしても安定的な収入確保のための具体的な方策が必要です。

運営委員会といたしましては、総会でもご説明いたしましたように、秋季大会には平成7年度からの会費の値上げ案を提案したいと考えております。現在の会費は、正会員が8000円、正会員（学生）5000円、在外会員が\$40です。それぞれのくらの値上げをすれば、今後何年間ぐらひ安定した学会財政が展開できるのかを秋季大会までに検討いたします。このことは、JGG誌の購読制問題や合同大会の運営方針などとも関係して、それほど単純な算術ではすみませんが、できるだけ具体的な数字に基づいて検討していくつもりです。なお、賛助会費の値上げは現状では考えておりません。以上学会の財政の現状と、今後の対策についての運営委員会の方針をご説明いたしました。これらの問題につきまして、会員の皆様からの率直なご意見を運営委員会あてにお寄せいただけるようお願いいたします。

地球電磁気・地球惑星圏学会 平成5年度決算書

平成5年4月1日～平成6年3月31日

収入の部

科目	5年予算額	決算額	差異	備考
会費	<u>6,107,690</u>	<u>6,314,093</u>	<u>-206,403</u>	
正会員	4,294,000	4,496,000	-202,000	
正会員(学生)	432,250	340,000	92,250	
海外会員	181,440	178,093	3,347	
賛助会員	1,200,000	1,300,000	-100,000	
出版助成金	14,405,000	7,060,000	7,345,000	
予稿集売上代	600,000	707,300	-107,300	
大会参加費	350,000	360,500	-10,500	
利子収入	350,000	456,476	-106,476	
雑収入	25,000	49,440	-24,440	
小計	21,837,690	14,947,809	6,889,881	
前期繰越金	1,427,724	1,427,724	0	
合計	23,265,414	16,375,533	6,889,881	

支出の部

科目	5年予算額	決算額	差異	備考
管理費	<u>3,130,000</u>	<u>3,021,633</u>	<u>108,367</u>	
業務委託費	2,400,000	2,314,575	85,425	
通信費	400,000	357,030	42,970	
印刷費	100,000	114,828	-14,828	
旅費	200,000	235,200	-35,200	
雑費	30,000	0	30,000	
事業費	<u>18,275,000</u>	<u>12,067,339</u>	<u>6,207,661</u>	
会誌分担金	15,245,000	8,914,000	6,331,000	
編集補助費	500,000	415,236	84,764	
J.G.G.発送費	650,000	781,796	-131,796	
会報印刷費	200,000	249,702	-49,702	
会報発送費	280,000	298,940	-18,940	
大会開催費	800,000	729,513	70,487	
予稿集印刷代	500,000	678,152	-178,152	
広報活動費	50,000	0	50,000	
名簿作製費	0	0	0	
その他	50,000	0	50,000	
基金交流事業費	800,000	545,000	255,000	
基金繰入金	400,000	655,000	-255,000	
予備費	100,000	0	100,000	
小計	22,705,000	16,288,972	6,416,028	
次期繰越金	560,414	86,561	473,853	
合計	23,265,414	16,375,533	6,889,881	

地球電磁気・地球惑星圏学会 平成6年度予算書

平成6年4月1日～平成7年3月31日

収入の部

科目	6年予算額	5年度予算額	決算額	備考
会費	<u>6,038,860</u>	<u>6,107,690</u>	<u>6,314,093</u>	
正会員	4,154,400	4,294,000	4,496,000	577x8000x.90
正会員(学生)	409,500	432,250	340,000	91x5000x.90
海外会員	174,960	181,440	178,093	54x5400x.60
賛助会員	1,300,000	1,200,000	1,300,000	
出版助成金	17,868,000	14,405,000	7,060,000	
J.G.G.発展事業特別出資金	3,000,000	0	0	(基金より)
予稿集売上代	700,000	600,000	707,300	
大会参加費	350,000	350,000	360,500	
利子収入	400,000	350,000	456,476	
雑収入	30,000	25,000	49,440	
小計	28,386,860	21,837,690	14,947,809	
前期繰越金	86,561	1,427,724	1,427,724	
合計	28,473,421	23,265,414	16,375,533	

支出の部

科目	6年予算額	5年予算額	決算額	備考
管理費	<u>3,130,000</u>	<u>3,130,000</u>	<u>3,021,633</u>	
業務委託費	2,400,000	2,400,000	2,314,575	
通信費	400,000	400,000	357,030	
印刷費	100,000	100,000	114,828	
旅費	200,000	200,000	235,200	
雑費	30,000	30,000	0	
事業費	<u>23,648,000</u>	<u>18,275,000</u>	<u>12,067,339</u>	
会誌分担金	19,718,000	15,245,000	8,914,000	735冊
編集補助費	500,000	500,000	415,236	
J.G.G.発送費	800,000	650,000	781,796	
会報印刷費	250,000	200,000	249,702	
会報発送費	300,000	280,000	298,940	
大会開催費	700,000	800,000	729,513	
予稿集印刷代	600,000	500,000	678,152	
広報活動費	30,000	50,000	0	
名簿作製費	700,000	0	0	
その他	50,000	50,000	0	
基金交流事業費	700,000	800,000	545,000	
基金繰入金	0	400,000	655,000	
予備費	100,000	100,000	0	
小計	27,578,000	22,705,000	16,288,972	
次期繰越金	895,421	560,414	86,561	
合計	28,473,421	23,265,414	16,375,533	

<学会基金>

科 目	決 算 額
当期繰入金	1,104,904
前期繰越金	11,400,000
合 計	12,504,904

(注) 利子は一般会計へ繰入

<特別会計>

田中館賞(平成5年度)

収入の部		支出の部	
科 目	決算額	科 目	決算額
利子収入	35,823	賞 牌 代	11,013
前期繰越金	832,453	次期繰越金	857,263
合 計	868,276	合 計	868,276

長谷川・永田賞(平成5年度)

収入の部		支出の部	
科 目	決算額	科 目	決算額
利子収入	27,505	賞 牌 代	54,393
前期繰越金	400,022	次期繰越金	373,134
合 計	427,527	合 計	427,527

9. 今年度の国際交流事業について

当学会では国際交流事業として本年度も、●地球電磁気・地球惑星圏学会講演会への海外参加候補者●国際学術研究集会への出席補助金受領候補者の募集をおこないます。本年度の締め切りは前者は9月10日、後者は8月31日と2月28日です。応募には、所定の申請書類(学会事務センター備付)を本学会運営委員会に提出して下さい。補助金受領者の選考・義務等については学会基金による国際学術交流事業運用規定(会報132号参照)をご参照下さい。

10. 田中館賞推薦について

今年度の田中館賞の推薦のメ切は9月10日です。候補者を推薦なさる場合には、推薦状、業績(論文)リストと別刷り、略歴書、各11部を期日までに学会会長宛お送りください。

11. 新入会員紹介

昨年の秋の総会以降に本学会に入会された方々は以下のとおりです。

正会員

- ✓渡辺 邦久 極東貿易
- ✓高杉 真司 地熱技術開発(株)
- ✓児玉 百利 宇宙技術開発(株)
- ✓和田 淳 電力中央研究所

正会員(学生)

- ✓坂中 伸也 京都大学防災研究所
- ✓市来 雅啓 鹿児島大学大学院理学研究科
- ✓篠崎 憲二 東北大学大学院理学研究科
- ✓劉 洪 東京大学大学院理学研究科
- ✓日下 拓 東京大学大学院理学研究科
- ✓渡辺 正和 東京大学大学院理学研究科
- ✓坪内 健 東京大学大学院理学研究科
- ✓篠原 育 東京大学大学院理学研究科
- 堀内 史有 神戸大学大学院理学研究科

海外会員

027

Biplab Ganguly (Kazakhstan)

Institute of Ionosphere of National Academy of Sciences

Yuri Alexeivich Sukovatov (Kazakhstan)

Institute of Ionosphere of National Academy of Sciences

Vichislav Michailovich Somsikov (Kazakhstan)

Institute of Ionosphere of National Academy of Sciences

Victor Ivanovich Drobjev (Kazakhstan)

Institute of Ionosphere of National Academy of Sciences

以上の新入会員加入により、3月22日現在、正会員566名、正会員(学生)81名、海外会員54名、名誉会員4名、賛助会員17社となります。

12. 次期、次々期学会講演会開催地

次期(1994年秋)の第96回総会ならびに講演会は10月18日から21日の四日間、名古屋大学で開催します。宿の予約は早めをお願いします。講演・セッションのスケジュールは7月中旬発送予定の次期の会報でお知らせいたします。また、1995年春の合同学会は3月27日から30日の四日間日本大学文学部で行なわれる予定です。

13. 国際学術交流事業補助金受領者の報告

大野正夫 (東大理)

国際学術集会出席補助金を受け、1993年8月9日から20日にかけてアルゼンチンのブエノスアイレスで開かれたIAGA (International Association of Geomagnetism and Aeronomy) の第7回大会に参加しました。

日本から30時間近くかかって到着したブエノスアイレスは大変美しい都市でしたが、また一方ではとにかく車と人の多い都市でした。市内は交通量が多いうえに、「車は人の上を走る」と言われる程の自動車優先で、私も何度か怖い思いをしました。また私は地下鉄に乗って学会会場に通いますが、朝夕は東京の通勤ラッシュと変わらない混雑でした。

大会は市街地にあるサンマルチン劇場という立派な建物で開かれました。開会当初は意外に参加者が少なかったのですが、3日目頃から人も増え、また休憩所などの会場設備もようやく整ってきて徐々に賑わってきました。

大会において私は「Paleosecular variation - intensity and direction -」のセッションで発表を行いました。このセッションは発表者、聴衆とも特に多く、また途中火事騒ぎによる一時間程の中断 (Fire Break?) があったこともあって、朝8時半から夕方6時半までの長時間にわたって大変熱い議論が行われました。なかでも古地球磁場強度を求める実験の信頼性については特に白熱した議論が行われたのが印象的でした。また、地磁気永年変化に関する堆積物、溶岩、考古地磁気のあらゆる研究において、古地磁気測定の信頼性と共に精度のよい年代測定の重要性が

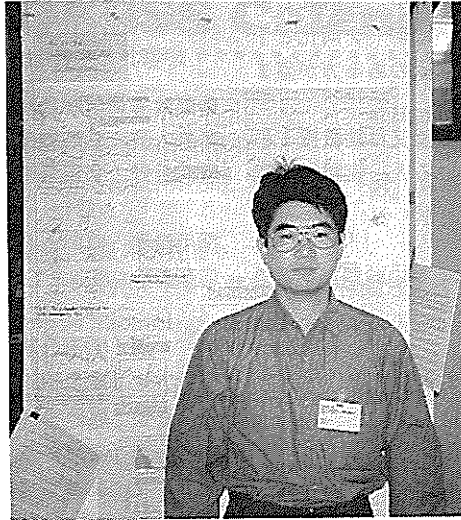
強調されました。また、考古地磁気の研究発表が比較的多かったのですが、楽しみにしていた南米や旧ソ連の考古地磁気研究に関する講演はキャンセルが多く残念でした。

私はこのセッションで2件の発表を行いました。1件は日本における過去3万5千年間の地磁気の変動を海底堆積物の古地磁気から求めた研究についての発表で、もう1件は過去1万年間のグローバルな地球磁場変動についての発表でした。両方の発表ともかなり反響があったと思います。いくつかの有意義なコメントを得ましたが、世界の研究者のデータを吟味する目は厳しく、古地磁気測定の結果が地球磁場変動起源であることを納得させるのは容易ではないことを実感しました。

ところで、このような海底や湖底の堆積物から地球磁場の方向の変動を調べた研究は、本大会でもあまり多くはありませんでした。1

980年代に盛んだったこの手の研究の論文がここ数年非常に少ないのですが、グローバルな磁場変動の一端がようやく見え始めた現在、新しい古地磁気データの発表が少ないのは残念なことです。

私は外国で開かれた学会に参加したのは今回が初めてでしたが、数多くの有意義な経験を得ることができました。また英語の通じない国での生活も新しい経験でした。日本からの参加者には若手は比較的少なかったように思います。この補助金の制度を活用して、多くの若手の方々が大いに活躍されるとよいと思います。



14. 人事公募

●東京工業大学理学部地球・惑星科学科

公募の対象：(a)固体地球物理学、(b)テクトニクス、それぞれ助手1名ずつ計2名。いずれも学部学生の地球惑星科学実験の教育のため、実験的(観測、機器開発等を含む)な素養のあることが望ましい。

着任時期：平成6年10月

応募書類：

- 履歴書
- 業績目録(査読雑誌掲載「論文」とそれ以外の「総説等」に分けてください)
- 主要論文の別刷(あるいはそのコピー)
- 今後の研究計画、抱負など
- 応募者に関する所見を伺うことのできる方)

1 ないし 2 名の氏名及び連絡先
応募書類の締切：平成 6 年 7 月 25 日（月）必着
応募書類送付先ならびに問い合わせ先：
〒152 東京都目黒区大岡山 2-12-1
東京工業大学理学部地球・惑星科学科
学科長 齊藤正徳
Tel 03-5734-2342 Fax 03-5499-4093

●東京大学大学院理学系研究科地球惑星物理学教室

1. 公募の対象

(1)大気海洋物理学大講座 助教授 1 名
大気海洋力学（特に海洋物理学）を研究して
いる人。海洋モデルを用いたデータ同化と予
報可能性の基礎的研究に意欲のある方が望ま
しい。

(2)固体地球物理学大講座 教授又は助教授 1 名
地球（惑星）を研究している人。実験的研究
に理解があることが望ましい。

2. 着任時期

平成 6 年度内（決定後なるべく早い時期）を希望

3. 応募書類等

○略歴書（学歴および職歴）

○業績目録（レフェリーのある論文と、それ以
外の総説等に分けて下さい）

○主要論文 3 編の別刷またはコピー

○他薦の場合は推薦状、自薦の場合は応募者に
関する所見を伺うことのできる 2～3 名の方
の氏名と連絡先（住所、電話等）

○自薦の場合、今後の研究計画・抱負等（A 4
版 2 枚程度）

○(2)は教授又は助教授のいずれのポストへの応

募かを明記して下さい。

4. 応募・推薦締切

(1)は平成 6 年 9 月 1 日（木）必着

(2)は平成 6 年 9 月 14 日（水）必着

5. 書類送付先並びに問い合わせ先

〒113 東京都文京区弥生 2-11-16

東京大学大学院理学系研究科

地球惑星物理学教室

主任 河野 長

Tel 03-3812-2111 内線 4310

Fax 03-3818-3247

応募書類の封筒には「教授応募」または「助教授
応募」と朱書きし、簡易書留で郵送して下さい。

●郵政省通信総合研究所

募集人員：2 名程度

研究分野：宇宙科学分野（宇宙科学、宇宙環境計測
等）

採用時期：原則として、平成 7 年 4 月 1 日

応募資格：原則として 35 歳未満・採用の時点で博士
の学位を有すること（外国人も可）

待遇：国家公務員試験（特）種採用者と同等

選考方法：職員採用選考委員会にて選考

提出書類：履歴書、論文リスト、研究経歴書

締切：平成 6 年 9 月 3 日

送付先：郵政省通信総合研究所 企画部企画課
長

〒184 東京都小金井市貫井北町 4-2-1

問合せ先：FAX 0423 - 27 - 7458 浜苑

E-mail hama@crl.go.jp

1 5. 研究助成金案内（下記助成金のいずれについても詳しくは総務まで。）

●東レ科学振興会（平成 6 年度）

〒切 1994 年 10 月 7 日（金）必着

独創的、萌芽的研究を活発に行なっている若手研
究者対象。総額 1 億 3 千万円、10 件程度（一件当
たりの金額は特に定めませんが、3,000 万円程度までは
積極的に助成する）。推薦枠 2 件以内。

連絡先

財団法人東レ科学振興会

〒279 千葉県浦安市美浜一丁目 8-1

0473-50-6103 fax 50-6082

●国際通信研究奨励金（平成 6 年度）

〒切 1994 年 7 月 13 日（水）必着

国際電気通信に関係する工学的または社会科学的
な基礎研究および応用的調査研究を行なう個人又は
団体対象。総額 2,500 万円程度を 10 件程度に分割し
て補助。

連絡先：財団法人

KDD エンジニアリング・アンドコンサルティング

〒153 東京都目黒区中目黒 2 丁目 1-23

03-3794-8203

●日本証券奨学財団（平成 6 年度）

〒切 1994 年 8 月 19 日

大学において学術文化の研究調査に従事している
55 才以下の個人又はグループが対象。新素材及び環
境改善に関する萌芽的研究を重視する。総額 6000 万

円。一件につき100万円程度、ただし、特に必要と認められる場合は300万円の範囲で助成を行なう。

連絡先

財団法人日本証券奨学財団
〒103東京都中央区日本橋茅場町1丁目5-8
東京証券会館3階
Tel 03-3664-7113

基礎科学分野の45才未満の研究者が研究計画の推進に協力が得られる35才未満の研究者を外部から選定し、井上フェローとして参加させるための助成。平成7年4月1日から2年間。支給経費は月額33万円（外国人の場合は、往復国際航空運賃等も支給）。

連絡先

財団法人井上科学振興財団
〒150 東京都渋谷区猿樂町 11-20

●井上フェロー（平成7年度）

〆切1994年9月30日

03-3477-2738 fax 3477-2747

SGEPSS Calender

1994年

- 7月11日～21日 COSPAR at Hamberg (Germany)
- 7月16日～22日 Shoemaker-Levy 9 彗星の木星衝突
- 7月25日～29日 West Pacific Geophysical Meeting 於 香港
- 8月3日～5日 月・惑星シンポジウム 於 宇宙科学研究所
- 8月3日～5日 岩石磁気古地磁気夏の研究会
於 千葉大学理学部海洋生態系研究センター小湊実験場
- 8月7日～13日 12th Workshop on Electromagnetic Induction in the Earth
at Brest, France
- 8月8日～12日 The 4th SEDI (Study of the Earth's Deep Interior) symposium
at Whistler Mountain, Canada.
- 10月18日～21日 地球電磁気・地球惑星圏学会第96回総会ならびに講演会
於 名古屋大学
- 10月1日～2日 第18回極域における電離圏磁気圏総合観測シンポジウム
於 国立極地研究所
- 11月予定 太陽系科学シンポジウム 於 宇宙科学研究所
- 11月予定 磁気圏電磁圏シンポジウム 於 宇宙科学研究所

1995年

- 2月1日 IUGG XXI General Assembly, abstract deadline.
- 3月27日～30日 地球惑星科学関連学会合同大会 於 日本大学文理学部
- 7月2日～14日 International Union of Geodesy and Geophysics (IUGG) XXI General Assembly
at Boulder, Colorado, USA.

国内外の学会、研究会、委員会、締切等がございましたらSGEPSSカレンダーに掲載致したいと思しますので会報担当の渋谷までお知らせください。

地球電磁気・地球惑星圏学会

会長 大家 寛 総務 森岡 昭

〒980 仙台市青葉区荒巻字青葉 東北大学理学部宇宙地球物理学教室 022-222-1800 ex.3347 Fax 262-6332

庶務 渋谷秀敏（会報担当）・浜野洋三

〒593 堺市学園町1-1 大阪府立大学総合科学部地学教室

0722-52-1161 ex 3735 Fax 55-2981 e-mail shibuya@cias.osakafu-u.ac.jp

運営委員会 〒113東京都文京区本駒込5丁目16番9号学会センターC21(財)日本学会事務センター気付

03-5814-5810 会員業務（入退会、住所変更等、会費、会誌）

03-5814-5801 学会業務（庶務、窓口、渉外）

03-5814-5820 ファクシミリ

入会申し込み、国際学術交流事業への応募は運営委員会宛、田中館賞推薦は会長宛、研究助成金案内は総務宛、会報への投稿は担当庶務宛ご連絡ください。会報へのご提案、ご意見、情報提供、寄稿をお待ちしています。

地球電磁気・地球惑星圏学会名簿調査アンケート用紙

今年の秋に学会名簿の改訂版を出す予定です。現在の名簿の記載事項に変更のある方は下記の締め切り日までにこのアンケート用紙に記入の上、学会事務センターにお送り下さい。

締め切り日 平成 6 年 7 月 2 9 日 (厳守して下さい。)

(送付先) 〒 1 1 3 東京都文京区本駒込 5 - 1 6 - 9 日本学会事務センター内
地球電磁気・地球惑星圏学会 名簿訂正係

(この用紙をコピーしてお使い下さい。訂正部分は赤字で目立つようにして下さい。)

- 名簿訂正のみ
 会誌送付先も変更

漢字氏名 _____ 会員番号 _____ (正、学生) 会員

ローマ字氏名 _____

(名字、名前の順)

所属機関名称 _____

所属機関住所 〒 _____

電話番号 _____ (代表、直通) 内線 _____

F A X 番号 _____

E - m a i l 番号 _____

(主なもの一つ)

自宅住所 〒 _____

自宅電話番号 _____

最終学歴 _____ 大学 _____ 学部 _____ 学科 1 9 _____ 年卒業

_____ 大学大学院 _____ 研究科 (修士、博士) 課程

_____ 専攻 1 9 _____ 年修了

専門 (次の中から一つ選んでチェックして下さい)

- | | | | |
|------------|-----------|-----------|----------|
| 宇宙線物理 | 岩石磁気・古地磁気 | 電波工学 | 電波・赤外天文 |
| 地球・惑星内部 | 環境科学 | 惑星間空間 | 地球内部電磁気学 |
| 生物科学 | 太陽物理 | 年代学 | 宇宙工学 |
| 地球・惑星磁気圏 | 火山学 | 宇宙プラズマ | 地球・惑星電離圏 |
| 地震学 | 地球・惑星探査 | 地球・惑星大気 | 海洋学 |
| 測地学 | 太陽系・惑星起源論 | 物理探査 | 地球・惑星地質学 |
| 地球・惑星磁場生成論 | 磁気探査・磁気異常 | 地球・惑星開発工学 | |